論 文 内 容 の 要 約

放送大学大学院文化科学研究科
文化科学専攻人文学プログラム
２０１８年度入学
学生番号　１８１７０００１２６
丹治 正弘（たんじまさひろ）

１．論文題目
日蓮の世界認識の方法

２．論文要約
序章
日蓮に関する日本史学・日本思想史学研究の主要テーマは、国家・体制・政治と宗教の問題に収斂すると見てよい。具体的には、仏法為本論、王仏冥合（法国冥合）論、国王・国主観、体制観、神祇観、世界観、対外観などである。教義・教団史研究における論点には、天台本覚思想（中古天台法門）の影響の有無、布教手段をめぐる摂折論、教化伝道に関連するテーマ（日蓮による軍記、説話、類書等の受容の問題）等がある。なお両者に共通する問題として日蓮著作の真偽問題がある。本論では日本史学・日本思想史学研究の立場から、日蓮による体制相対化の思想的・理論的基盤の形成過程とその構造、対外観、世界観、文化的受容など、これまで十全に明らかにされてこなかったテーマに関して検証する。
第１章
日蓮の人生と思想の画期は、鎌倉幕府による逮捕、鎌倉近郊・龍口での斬首（未遂）、佐渡への流罪を含む「文永八年の法難」とされ、従来は「法難」の前後における教義面での変化に関心が集中してきた。しかしながら佐渡以前（佐前）・以後（佐後）の日蓮著作における特徴的な言葉の用例に鑑みると、佐後は今日の世界・全世界を意味する仏教用語である「一閻浮提」の語を頻繁に使用しはじめることから、日蓮にとっての「法難」の意義とは、むしろその世界観が転換したところに求めえると考えられる。日本中世にあっては、三国世界観、すなわちこの世界はインド・中国・日本の三国で構成されるとする日本独特の世界観が広く受容されており、佐前の日蓮もそのパラダイムのうちにあった。それが佐後にいたると、この三国の語に代えて一閻浮提の語を使用することで、従来の三国世界観を超克し、一閻浮提世界観ともいうべき認識に到達したと考えられる。その背景には１３世紀の日本国内における交通の発達、国土の数量的把握、そして何よりも蒙古襲来の危機をはじめとする対外情勢の流動化と、それに伴う地理的関

心と知見の拡大が指摘できる。
第１章・補論
　日蓮は一閻浮提の語、および世界宣教を意味する「一閻浮提に広宣流布せん」等の表現を使用したが、今日の日蓮系諸教団では、これらの言葉というよりも、「一天四海」および「一天四海皆帰妙法」という言葉を、その象徴的な表現として使用している。しかしこれらの言葉は実際には日蓮著作に存在しない。たとえば日蓮が「一天」と「四海」を単独で使用した例はあるものの、それらはいずれも日本一国を意味しており、一閻浮提の語のように世界を意味する言葉ではない。では、いつ、なぜ後者が前者に置き換わるにいたったのかについては、史料的制約から明らかではないものの、その時期はおよそ１６世紀後半以降と推定される。またその背景として、世俗権力に対する宗教の優越を説いた日蓮教説の性格と、近世の統一権力による宗教統制の影響が想定される。
第２章
　戦後の史学・思想史学研究における日蓮理解の一つに、その特異な正統意識がある。この問題について従来は、日蓮が自身を仏教史の上で釈尊・智顗・最澄を継承する正統な後継者と位置づけていた等の観点から理解されてきた。しかし日蓮の著作をたどると、その正統意識の内実とは、自説の優越意識ばかりではなく、それを唱導した日蓮自身に対する体制および社会の随順を強く要求するものであったことが分かる。よって注目するべきは、日蓮が社会における自説と自身の正統化という意味での社会化を目指したことであり、換言すれば、日蓮の内的次元における正統意識だけではなく、社会的次元における正統性の訴求方法であるといえる。その考察の手がかりとなるのは日蓮の対外認識であって、佐後の日蓮は日本の上位に一閻浮提という高次・広域の概念を設定し、そこで自説を宣布すべきことを主張するにいたる。すなわち、日本以外の地域において自説の正統性を獲得することで、それよりも下位に位置する日本における正統性をも獲得し、日本の体制・社会への訴求をはかっていたと考えられる。
第３章
　戦後の日蓮研究においては、佐後の日蓮がそれまでの体制受容の姿勢を一変させて体制を相対化したことが主張され、さらにその理論的基盤として、この現実世界が釈尊の所有するところであり、日本の為政者は釈尊への随順を条件として釈尊からかりそめに統治を委ねられているという「釈尊御領観」が指摘されてきた。しかし佐後の日蓮著作を検討すると、その体制相対化の背景には、釈尊御領観という仏教由来の要素だけではなく、現実の国土の物理的大小によって日本と日本以外の地域を比較・対照することで日本を相対化するという視座が認められる。また地理的空間の実体的把握の表れという観点から見るならば、佐後の日蓮は現在のインドを意味する「天竺」の語の使用を意図的に回避しており、代わって今日のアジア全域を含意する言葉として「月氏」の語を採用していた。さらに地理的に日本に最も近接する韓・朝鮮半島は、三国世界観のもとで長く捨

象されていたが、日蓮はその歴史的意義について再認識し、半島を仏教伝来の歴史における日本の上位の存在として位置づけることで、重ねて日本の相対化をはかっていたことが分かる。

第４章

日蓮の伝記、対外関係史研究などにおいてしばしば言及されながら、その内実がよく把握されていない問題の一つに、日蓮の対外意識が挙げられる。その背景には、明治以降の国家主義と結びつくかたちで発展した日蓮主義が、海外宣教にまつわる日蓮の言説について、日本の対外侵略を正当化する文脈で利用したという歴史的経緯が存在する。そこで改めて佐前・佐後の関連著作を比較・対照すると、日蓮の対外意識をうかがいうる軌跡として、佐前の日蓮は中世日本で一般的に受容されていた仏教東漸説（インド→中国→日本への仏教伝来）を受容していたが、佐後は仏教西還説（日本仏教による半島→中国→インドへの還流）に転換したことを指摘できる。また元来、この西還説は日蓮の創見とされてきたが、関連著作を時系列でたどると、もともとは東漸説を母体とし、そこから派生したこと、また日蓮は西還説を構想するにあたって仏典の内容を改変していることから、日蓮にとっての仏教西還説とは、それほどまでに重要な概念であったといえる。さらにこれらのことから日蓮の対外意識の内実とは、戦前の日蓮主義が鼓吹したような対外的侵略を意図するものではなく、あくまでも自説の海外展開にあったといえる。

第５章

日蓮は仏典のみならず中国の史書や日本の軍記・説話等から多くを受容したが、そのうち最も親炙したのが一般に仏教説話集と分類される『宝物集』である。このことは日蓮著作に同書が多く引用されているほか、同書の中世写本が日蓮系寺院に少なからず伝来し、なおかつ日蓮に仮託された後世の偽撰書にも同書の引用が数多く検出されることなどから明らかである。しかしながらこれまでなぜ日蓮は同書を重視したのか、また同書が日蓮の思想上、どのように位置づけられるのか等については明らかにされてきたとはいえない。そこで改めて日蓮著作をたどると、日蓮は佐後のキーワードである一閻浮提という言葉を、仏典からではなく、『宝物集』から得ていたと推認できる。また日蓮が檀越の供養への依存度を高めるにしたがって同書の使用例もまた増加すること、さらに日蓮示寂後に諸門流が展開し、互いにその正統性を主張しはじめる時期と軌を一にするかたちで、同書を引く偽撰書が現れることなどから、日蓮にとって『宝物集』とは、単なる教化激励用の素材の域にとどまるものではなく、日蓮の思想的営為を支える上で重要なリソースであったといえる。

第５章・補論

『宝物集』への親炙は日蓮著作から明らかであるが、日蓮が軍記・説話を積極的に受容していた事実は、日蓮著作によって直接に確認される作品ばかりではなく、日蓮直弟の著作からも確認しうる。たとえば日蓮直弟・日法が日蓮の講義

を筆録したと考えられる『聖人之御法門聴聞分集』である。ここには日蓮の著作からは確認しえない後白河院の熊野参詣にまつわる説話が含まれている。この事実は日蓮が著作に利用した以外にも説話に関して豊富な知識を持っており、それを門弟講説における教材としても用いていたことを伝えている。

第６章

日蓮最大の画期である「文永八年の法難」の中核をなす出来事が、鎌倉近郊・龍口での霊験譚である。これは日蓮が龍口で斬首されようとしたさいに突如として「光物」なるものが現れ、よって危難を逃れたというものであり、日蓮著作にも少なからず記されている。しかしながらこの霊験譚が、長門本『平家物語』の収める平盛久の観音利生譚と極めて近似していることは、江戸後期の平田篤胤などによって指摘されてきたところである。また戦後の研究によって日蓮が『平家物語』諸本成立の前段階に位置し、当時は「平家」と称されていたと想定される説話群を受容していたことが明らかになっている。すなわち龍口において実際に何が起こったのかは知り得ないものの、その事件を宗教的体験として描写ないし再構成するにあたって、日蓮は同時代の説話に範を取っていた可能性を指摘できる。このこともまた、いかに日蓮が軍記・説話について内在化していたかを端的に物語る事例といえる。

終章

日蓮といえばそのファナテックなまでの宗教的個性が指摘されてきたが、その社会と体制、宗教と文化、総じて人間および人間を取り巻く一切の事象としての世界を認識する上での方法とは、そのような宗教に由来する要素ばかりではなく、地理的・空間的認識、対外的関係、文化的環境をはじめとする現実の社会的諸関係に由来する要素にも大きく依拠しており、さらに日本と世界の相互連関性を重視するものであった。換言するならば「規範としての宗教」、「現世の内在化」、「世界という視座」ともいうべき要素によって複合的に構成されていたといえる。また日蓮が一閻浮提世界観とも称するべき認識の広がりによって、中世日本の三国世界観の限定的な認識の枠組みを乗りこえて、中世日本人の思考の射程を拡張したことは、日本人が１３世紀において果たした達成の一つといえる。さらに本邦成立の諸宗諸教はもとより、今日において世界宗教と呼ばれる諸宗教すら必ずしもその創唱の当初から世界への宣布を構想していたわけではなかったことを考えるならば、その在世当時から自説の世界的展開を展望していたことを示す日蓮の海外宣布の概念は、１３世紀の日本のみならず、世界の宗教史における日本仏教の達成とも位置づけられよう。